

# IBC 番外編 アムステルダム探訪談



石田 武久

進展目覚しい放送、映像、通信メディアの最新動向を体感しようと、毎年のようにNAB(ラスベガス)やIBC(アムステルダム)に取材に出かけ、出展物の技術動向などを紹介させて貰っている。広い展示会場を廻り様々な最新技術を見て回ることは楽しいことであるが、外国では日頃味わえないことや思いがけないことに遭遇することもある。旅は道連れ世は情け、一期一会と言うが、様々な人と出会い、予想しないハプニングに会うことも、この上ない楽しいことである。

本稿は、最近日本からの来場者が減少気味のIBCの歴史とその舞台のアムステルダムについて体験に基づいて語ってみたい。ここで紹介するのは、筆者が何年かにわたりIBCに出かけたおりに、取材の合間に体験したことの一部をまとめて書いたので、アムステルダムの全貌を見たわけではなく、ほんの一部に過ぎない。それでも、様々な体験をし、色々な人と出会い、行きたびにハプニングにも出くわす。

いずれにしろIBCの舞台であるアムステルダムはNABやInterBEEでは体験できないスポットを数多く抱え、何度行っても新たな体験をできる魅力ある街である。行ったことがある方には思い起こして貰い、これから行ってみたいと思っている方には少しでも参考にしていただき、その気のない方には遠い異国の情景にしばし思いをさせて貰えれば幸いである。

まずはIBCの歴史について触れておきたい。IBCの前身とも言える「国際テレビシンポジウム」がモントルーで開かれたのは1961年、「InterBEE」が始まったのは1965年、その2年後に欧州放送機器展としてInternational Broadcasting



写1. IBCの歴史について語るピーターオーエン会長(InterBEE2014にて)

Convention (IBC) がロンドンで開催された。これらの経緯については、昨年50周年を迎えたInterBEE2014の特別講演で、IBCの生き証人のようなオーエン会長が語っていた。

第1回IBC会場となったのはロンドン市内の「Royal Lancaster Hotel」で、この時参加した出展者数はわずか32社、コンベンションには500人だったそうだ。それが今や、来場者は世界170国から5万5千人を数える盛況さで隔世の感がある。当時は東京オリンピック(1964)が終わってまもなくのことで、カラーテレビがようやく普及し始めた頃でももちろんアナログ放送時代だった。

その後、財政状況などのため、開催場所を転々としながら、徐々に規模も拡大し、より広いスペースを求め、1992年にオランダのアムステルダムに移り、以来20数年、昨年46回目を迎え今や米国NAB、日本のInterBEEと並び世界3大放送機器展へと成長している。

その経緯の中で、放送メディア史上、大きなターニングポイントだったのは1982年のブライトン(英)大会で、同時開催となったEBU総会の場合、NHK技研で開発されてまもない高品位テレビ(ハイビジ



写2. IBC2014 エントランス付近の情景

ョンの前称)と呼ばれていた次世代の高精細度テレビHDTVが初公開された。当時、精細度が低く小画面のテレビ時代に、日本が開発した高精細度で大画面(と言っても30インチに過ぎなかったが)の次世代テレビは参加者に大きな衝撃を与えた。これが欧州におけるHDTVのスタートポイントだった。

それから20数年、8K SHVがIBCに初登場したのは2008年のことである。NHKがBBC、EBUと共同で出展し、ロンドンからアムステルまで国際生中継されIBC特別賞を受賞した。それから2年後の2010年には、フルスペック(3300万画素)の8Kカメラや家庭用を狙った超高精細度の8K PDPテレビも展示され、300インチサイズの大画面と22.2CHサラウンド音響のSHVシアターは、見学者に大きな衝撃を与えた。この時にはアムステルダム中央駅付近のショットが光ケーブル経由で非圧縮で生中継された。

現在、IBC会場となっているRAIコンベンションセンターは、マレーシャ航空機撃墜で一躍有名になったオランダの空の玄関のスキポール空港から電車で20分位、陸の玄関のセントラルステーションからだと、路面電車のトラムカーでのんびり走る



写 3. かつての海運国を象徴する帆船の模型  
(国立ミュージアムにて)



写 4. 華やかなカナルツアー乗り場

こと約 30 分位、近郊の住宅街、ビジネス街の中にある。展示会場は NAB や Inter BEE のように大きなホールに集約されておらず、14 もの中小規模のホールが通路や渡り廊下、階段を介して複雑に入り組んでおり、各ブースを見て回るには時間と体力の要する。エントランス付近は例年趣向が凝らされ、昨年は大きな人形型モニュメントと張りぼてのアムステルダムの街並みが並び、各国からの遠来の来場者の目を楽しませていた。

IBC の舞台のアムステルダムの歴史について簡単に触れておこう。13 世紀頃、北はノルウェイ、東はイギリスに広がる北海に繋がるザウダーゼーと呼ばれた入り江に流れ込むアムステル川の低地にダムを造り、その周辺に人々が住み始めたのがアムステルダム発祥の由来である。オランダの国名「ネーデルランド(低い土地の意味)」が示すように、国土の 4 分の 1 は海拔ゼロメートル以下である。オランダと言えば風車を

思い浮かべるが、オランダの歴史は常に水の驚異にさらされ続け、ゼロメートル以下の水を汲み上げ海にはき出す目的で作られたのが風車である。

その一方で、オランダは海に開かれた地の利を活かし、中世以降、世界有数の海運国としてのし上がり、工業国としても栄えてきた。鎖国をしていた江戸時代には、長崎の出島に象徴されるように欧米諸国の中で日本と最も縁の深かった国である。そのおかげが我ら日本人にとって親近感を覚える国である。その首都がアムステルダムで、人口 74 万(意外に少ない)を抱える大都市である。

外国での楽しみのひとつは、現地で色々な乗り物に乗ることである。アムステルダムの足廻り、交通事情について見てみよう。水の都にとって欠かせないのが運河を巡る船だ。市街地の地図を見ると、運河が放射状、円形状に張り巡らされており、そこを平べったい船が行きかかっており、今でも重要な交通、運搬手段になっている。観光客にとってまずは乗ってみたいのがカナルツアーだ。ツアー乗り場は中央駅前広場に面したところにあり、料金はコースと時間によるがそんなに高くはない。

3 年位前に運河でとんでもない事に出くわした。ARRI が創立 95 周年記念パーティを IBC と別の会場で開催することになり、運河巡りしながらパーティ会場に案内すると聞き勇んで参加した。夕方 6 時頃、会場奥の大きな池の船着場に行くで大勢の人達であふれ、あちらこちらに向う船が何艘も留まっていた。我らが乗った ARRI の船は他

の船よりみすぼらしい小型の木造船だった。日本人は私一人で、相客はアメリカ人が多かったが各国語が飛び交っていた。出発してもまもなく、ワインが振舞われボトルを回し飲みしていたので遠慮した。出発してもまもなく、旧市街地の運河に比べ水も綺麗でとても気持ちよく、皆、大声を上げながら景色を楽しんでいた。

ところがその後、とんでもないことが起きた。怪しげな風体の船頭に操られた古い木造船は、中央駅近くを通り抜け、大きな運河を渡り対岸の方に向かった。時間も遅く、暗くなり、海風は冷たい。さっきまで元気だったアメリカ人達もやや不安げにどこに連れて行かれるのかの様相だった。まさかこんなところにパーティ会場などあるまいと思われる対岸の岸壁で全員下ろされてしまった。何かの行き違いがあったようで、どうやら違う場所につれて来られたらしい。皆、煙に巻かれた様子で文句を言う客もいたが、船頭は知らぬ存ぜぬで船はどこかへ行ってしまい、我らは何も吹きさらしの岸壁にとり残された。

乗客の一人が携帯でどこかと連絡を取っていたが、寒い中、待つばかりで、別の船が迎えに来たのは、一時間くらい経っていた。迎えの船に乗り 15 分くらいでなんとか運河に隣接したパーティ会場に着いたのは 9 時頃で、もちろんパーティはとうに始まっていた。ところが、主催者からお詫びがあるわけでもなく、いきなりワイングラスを渡された。すきっ腹なのに、冷たいアルコールはあるが、食べ物ほとんど無い。ようやく顔見知りを見つければしどろしどろだが、バスで来た連中もトラブルがあったらしい。帰りも別の船で夜中の 11 時頃に中

# MOGAMI LAN CABLE

## モガミ イーサネット ケーブル

### 施工工専用 LANケーブル

Part No.  
3367

施工工事時に有害鉄線のようにならず楽に配線出来るよう、平らにまっすぐ収まるように設計された LAN CABLE です。UL VW-1 難燃規格にも適合しており、標準で 3 色(青・灰・黄)用意しました。また、平均的な減衰測定値から 90m 前後までは TIA/EIA-568B Cat-5e 規格値を満たしますので、両端に接続される機器の電気的性能によりそれ以上の長さで使用出来る場合や、逆にそれ以下の利用長に制限される場合がありますので、際どい場合には利用前に実地確認する必要があります。

お問い合わせ エムアイティー株式会社
PHONE : (03)3439-3755
E-MAIL : mit@mogami.com
URL : http://www.mogami-wire.co.jp/





写 5. IBC 会場奥の船着場、乗船待ちの見学者で溢れていた



写 6. 古い木造船とヤーさん風の船頭

中央駅の裏手の岸壁まで送ってもらった。そこからホテルに歩いて帰る道すがら、ドーナツを食べコーヒーで身体を暖め、ようやく生き帰った次第である。とんでもないハプニングだったが、振り返るとこれも旅にはつき物の一つなのだ。

次に陸上の乗り物を紹介しよう。旧市街地では網の目のような細い運河沿いの石畳の街路の上を、青と白のツートンカラーのモダンなトラムカー（路面電車）がのんびりと走っている。路線は沢山あり街中を縦横に走っているの、市内巡りには大変便利だ。路線は複雑なのと表示が分かりにくいので、路線図と車内の電光表示板、停留所の看板をしっかりと見ておく必要がある。全てオランダ語なので外国人には分かりにくい。

でも見過ごしてひと駅を通り過ぎて、停留所と停留所の間隔は近いので歩いて戻っても大したことはない。チケットは乗車



写 7. 初めの内は景観を楽しんでいたが？



写 8. 市街地を走るしゃれたトラムカー

の際に車掌から直接買ってもよいが、何度も乗り降りすることを考えると一日券の方がよい。車内の電光表示板には次の停車駅名が出るので、それを確認し、カードをマークにかざすとゲートが開いて降りられる。ただし乗車口と下車口が別なので要注意だ。

IBC 会場のようにちょっと遠く目的地がはっきりしている場合には、国鉄電車かメトロの方が良い。チケットは切符売り場で買うか、自動販売機で買うが慣れるまでは操作が分かりにくいとコインしか使えず、しかもどのコインなのか区別がつかないので窓口で買うほうが無難である。しかし中央駅やスキポール空港のように大きな駅は良いが、IBC 会場の近くの RAI 駅では夕方早く窓口が閉まってしまう、その後は近くのコンビニでチケットを買うのだが、そのコンビニも夜 8 時には閉店になり、自動販売機で買うしかない。RAI 駅は地下鉄と国鉄電車の乗り場が隣接し、乗り口は似ているので間違えて乗るととんでもないところ



写 9. 車内の様子、観光客が地図を広げている、天井に電光表示板



写 10. RAI 駅の国鉄のホーム（別の時間帯）

に連れて行かれるので要注意だ。

この電車に乗った時も面白いことがあった。ある日、展示会終了後、会場近くの居酒屋で友人とビールを飲み交わし、酔い覚ましに RAI 駅まで歩き、何とかチケットを買い、ホームで電車を待っていた。時間が遅くなっていたので、電車の本数は少なくホームにはあまり人もおらず、ベンチでしばし待ちようやく来た電車に乗り座席に座ってほっとした。電車の扉が閉まりかけた間際に、人が乗り込んできたが、それが驚いたことに日本のメディア関係の S 氏だった。日本でたまに顔をあわせることはあったが、まさかアムステルダムの電車で乗り合わせるなんて奇跡としか言いようが無い。こちらは友達と飲んでいて遅くなったのに、彼は真面目にコンファレンスに出席し、同じ時間になったようだ。旅は道連れとばかりに、スキポール空港駅まで一緒に行き、空港ロビーにある店でオランダビールを飲みなおしつつ、話が大いに弾んだ。

BRIDGE TECHNOLOGIES Ethernet IPビデオストリーム & ASI アナライザー

VB12 ポータブルブロードキャスト IPブローブ



OTT Ready

- 10 マルチキャスト/ユニキャストのリアルタイム IPビデオモニタリング、最大50ストリームまで拡張可能 (オプション)
- ETSI TR 101 290 準拠 IPトランスポートストリームモニター (オプション)
- MPEG2, MPEG4 ストリーム, SD/HDサムネイル表示機能
- パケットジッター、メディアロス測定
- OTT (アダプティブ・ストリーミング) モニター
- VBC (Video Bridge Controller) サーバーソフトウェア、最大100台のVBシリーズブローブをまとめて一元管理可能、SALLレポート作成



ポータブルモデルVB12



ラックマウントモデルVB120. 6x1マルチフレックサVB242の組み合わせで12 ASIを常時監視可能

製造元:

BRIDGE TECHNOLOGIES Co AS

輸入販売元:

ネットワークエレクトロニクスジャパン 株式会社 ● TEL: 03-5542-3260 ● FAX: 03-3552-5070 ● http://www.network-electronics.co.jp



写 11. IBC 会場近くの満杯の駐輪場

オランダで乗り物と言えば自転車だ。平坦地だけに、老若男女、皆、自転車に乗っている。車道と歩道の間には 1m 幅の自転車専用道路があり、かなりのスピードで走っている。日本人の感覚と違うのでつい見逃しそうで、車より自転車の方が怖い。あちらこちらに自転車置き場があり、大量の自転車がとめられている。レンタルもあるので乗ってみたいと思ったが、慣れないと危険なのと、何よりも足の長さが違うのでサドルが高すぎ足が届きそうもないのであきらめた。

そろそろ街を歩いてみよう。まずは起点として、旧市街の一番北の湾岸沿いにあり、交通の要衝の「セントラルステーション」だ。1898 年に建造され、大きな赤レンガ造りの風格ある優美な建物で東京駅のモデルと言われる。最近修復され外観は昔のままだが、内部はかなり変わりモダンなコンビニやレストランなどもある。さすが自転車王国だけあって、駅舎内を自転車をひいている人もいる。列車のホームはかまぼこドーム屋根に覆われ、まさに映画のショットそのもののような雰囲気漂っている。そこに近代的装いの黒と黄色のツートンカラーの列車が行き来する情景は感激ものでシャッターを押したくなる。

旅先で大事なのはトイレだ。日本に比べると広い駅構内のわりにトイレは少なく狭くて小さい。電車待ちの時、トイレに行こうと思ったが、なかなか見つからず、探したらホームに接した駅舎の隅にひっそりあった。勇んで中に入ろうと思ったら、おばさんに呼び止められた。有料トイレのためコインが必要なのだ。小銭が無いので 1 ユーロ紙幣を渡したがお釣りはもらえない。外観のわりには中は清潔だったが日本より狭い。

駅前広場はトラムカーやバスの発着場になっており、いつも大勢の人たちが行き交っている。この中央駅を扇の要にするように旧市街地が広がっている。中世の面影を



写 12. セントラルステーション、内部構造も見える運河、こみが浮かび鳥も遊ぶ、



写 13. 思わずシャッターを押したくなる古臭いドーム屋根とモダンな電車

残す 3 角屋根のレンガ造りの建物が軒を連ね、その間を昔のままの細い運河が蜘蛛の巣のように張り巡らされ、観光客をいっばい乗せたカナルツアーの平べったい船が巡っている。

一見すると、どこを見ても絵や写真におさめたいような素晴らしい景観である。ところが運河に近寄って見ると、運河の水はほとんど流れがなくて黒く淀み臭さを感じる。アムステルダムを創る時、湿地に太い松ノ木を打ち込み、その上に建物を建てたそうで、今でも黒く変色した松の木の名残が見かけられる (写 12)。長い歴史に耐えてきたため、運河沿いは地盤沈下があるらしく、よく見ると左右前後に傾いている建物も見受けられる。日本の建物と違って、隣同士の建物が長く連なっており、お互いに支えあうと言うか、もたれあっているおかげで倒壊を免れているような建物も散見される。

駅を背に左手 (東側) に行くと、15 世紀に港の突端に建てられた灯台のような小さな建物がある。これはかつて危険な航海に向う男を女が涙と共に見送ったと言われる「涙の塔」で、今ではビアガーデンのような観光スポットになっている。それを横目で見て南側に下ると 14 世紀初めに建てられたアムステルダム最古の「旧教会」がある。荘厳な建物の内部や外部の見学は良いが、その周辺は有名な「飾り窓地帯」で要注意である。

昔、波止場として栄えていた頃、水夫達相手の安酒場や売春宿が集中し、今でもそ



写 14. 以前宿泊したホテル裏手の運河の景観



写 15. 前後左右に傾いているように見える運河沿いの建物もある

の名残がそのまま残っている。この一帯は近づかない方が良いと言われているが、野次馬精神でまだ明るい頃に近くを歩いてみた。まさに飾り窓があちらこちらにあり、下着姿の女性が窓の中から物憂げに外を見ている。聞いたところでは話がまとまるとカーテンを閉めるのだそうで、そう言えばあちこちらカーテンが閉まっていた。明るい時間帯だったせいか危ない感じはなく、観光客も連れ立って見物していた。

それよりもこの付近は麻薬街で、堂々と麻薬の取引がされているらしい。コーヒーを飲むためカフェには入っても良いが、コーヒーショップには近づくなと教えられた。と言うのは、コーヒーショップはマリファナなどを吸引する場所の別名で、言われて見ると店構えも窓から見える中の様子も怪しい雰囲気が漂っていた。この地域では狭い路地や建物の中には入らないほうが無難で、写真撮影は厳禁だ。それを犯せば、翌朝には近くの淀んだ運河に身体が浮かびと脅かされたので早々に引き上げた。

駅前広場に戻り、西側地区に行くと雰囲気ががらりと変わる。観光船の船着場があり、きれいな花が一杯の「ダムラック」を抜けると、大きな古風なレンガ造りの「旧証券取引所」があり、その周辺にはおみやげ屋がならび、明るい雰囲気で人通りも多い。15 分位ゆっくり歩いて南に下ると、有名な観光スポットでアムスのへそとか心臓と呼ばれる「ダム広場」につく。





写 16. 左が荘厳な王宮、右が新教会



写 17. 有名なマダムタッソー蠟人形館

広場と言ってもそれほど広くなく、西側正面には17世紀半ばに建造され、3年ほど前には新国王の戴冠式があった古色蒼然とした威風堂々たる王宮があり、その右手に、15世紀に建造された後期ゴシック様式の「新教会」が聳えている。広場の反対側には有名な「マダムタッソー蠟人形館」がある。今ではデパートになっているが、中には17世紀の頃の街並みが再現され、各国首脳やスポーツ選手、ロック歌手など有名人が勢ぞろいしており見物するのの一興だ。

しばし中世の街の感傷に耽った後、トラムカーに乗ってみよう。狭い街路を、自転車にも追い越されるようにのんびりと走り、周りの町並みを眺めながら10数分、アムステルダムで最も賑やかな歓楽街「ライツェ広場」で下車。昔、大学町として有名なライデンに向う城門があったが、今では映画館や若者むけのディスコやライブハウス、観光客向け高級店やレストランなどが並び歓楽街になっている。

あまり縁がなさそうなので早々にここを離れ、運河に架かる橋を渡りゆっくり歩いて10分くらい南に下ると、大きなお城のような建物が見えてくる。これが1885年に開館したオランダ最大の「国立ミュージアム」で、設計者は前述の中央駅と同じだそう。そう言えば外観が似ている。長年修復中で以前行った時には一部しか見られなかったが、去年は改装も終わり全館見学



写 18. 壮大な国立ミュージアムの威容



写 19. 大人気のレンブラントの「夜警」

することでできた。しかしあまりにも広大で、大勢の見学者を掻き分けつつ、お目当てのレンブラントの『夜警』やフェルメールの『牛乳を注ぐ女』などを見るだけでもひと苦労だった。特に前者は部屋の壁面一杯の大きなキャンバスに描かれているが、その前は人で溢れ全体像を見るのは困難だった。どこの美術館でもそうだが、広い会場を目当ての作品を探しながら作品を見て廻るのは大変疲れることだ。

そこから歩いてすぐ近くにある「ゴッホ美術館」も廻ってみたい。街並みにフィットしない近代的なコンクリート造りの建物で1973年に開館したそう。内部も近代的な美術館そのもので、『自画像』、『ひまわり』、『寝室』、『麦畑』など超有名な作品を間近に鑑賞することができた。どの作品も予想外に小さかった。ゴッホ美術館の裏手にセザンヌやモネなど印象派、シャガールやピカソの近代美術の粋を展示してある近代美術館があるが、残念ながらまだ見学していない。

名画をたっぷり鑑賞したが、いささかくたびれたし喉も渴いたので、近くにあるはずのハイネッケン発祥の地で本場のビールを楽しみたくなった。ミュージアム横の運河に掛かる橋の上で地図を広げていたら、思いがけず若い二人連れの女性から“May I help you!”と声をかけられた。どきまぎし下手な英語で返事をしたら、驚いたことに小柄な女性の方が日本語で話しかけてきた。2年ほど前に日本の大学に留学してい



写 20. フェルメールの「牛乳を注ぐ女」



写 21. 近代的なゴッホ美術館の外観



写 22. 超有名な「ひまわり」

て、日本語が忘れそうなので、橋の上でうろろしている日本人らしい白髪頭を見て、声をかけたのだろう。ちょっとたどたどしい日本語だったが、40年以上学んできた私の英語よりずっとまじだった。こんな所でオランダの女子大生と日本語で話をするなんてとても信じられないことだった。とっさのことで写真を撮れなかったことは痛恨の極みである。

しばし楽しい会話を交わし、道を聞いたおかげで、そこから歩いて10分位のところにある「ハイネッケン博物館」はすぐ見つかった。道路に面したレンガ造りの建物で、1988年まで実際にハイネッケンビールを製造する工場だったそう。今では博物館になっており、ハイネッケン・エキスぺリエンス・ツアーをやっており観光客で一杯だった。受付でチケットを買い、20人位のグループに分かれ、ビールの歴史や





写 23. ハイネッケン博物館の入口付近



写 26. レンブラント広場「夜警」の彫像



写 29. 中央駅から 15 分も乗ると田舎の風情



写 24. ビール製造工程をぐるっと見学



写 27. 運河沿の風車跡のビアガーデン



写 30. 近くで見ると大きく綺麗な風車



写 25. みんなでビールで乾杯!



写 28. ビールを手に楽しい国際交流!



写 31. 木靴の工房を見学

製造工程を見学する。ひと回りした所で出来あがったばかりのビールで乾杯した。この時もガイドの若者が片言の日本語で話しかけてきたが、どうやら世界からの観光客向けに、何ヶ国語も話せるらしい。

ハイネッケン博物館の近くで再びトラムカーに乗り 10 分くらいのところにある「レンブラント広場」も一見の価値がある。広場の中央には前述の『夜警』の実物大の彫像が並んでいる。油絵とまったく同じ構図で、いわばその立体版である。彫像と並び写真を撮っている観光客もいる。そこから歩いて近くの運河沿いには有名な花市場もある。テント造りの花屋がびっしりと軒を連ね、綺麗な花々とオランダ名産のチューリップの球根も売っている。この辺りはいかにもアムステルダムらしい下町の景観で、歩いているだけで心が癒される。

ビールと言えば、お気に入りスポットは中央駅からトラムカーで約 10 分、運河沿いにある風車の建物跡を改装した地ビールを飲ませてくれる店がある。カウンターで

好みのビールとチーズやソーセージのつまみを注文し、外に並んだ粗末な木造のベンチで飲むのだ。ここも観光スポットで、世界中から来た観光客同士が、運河の風を頬に受つつジョッキを手に、各国語入り混じり手振り、身振りも交え交流している。何種類かの地ビールが楽しめ、見ず知らずの人達同士のちんぷんかんぷんの交流に、取材の疲れが癒されつい時間が経つのも忘れてしまう。

市街地を離れて郊外にも足をのばしてみたい。中央駅から電車で 20 分位と近い風車の村ザーセ・スカンスがお奨めだ。ここへ出かけた時にもへまをやらかした。事前に調べていたのだが、駅名表示が判りにくく、うっかり一駅通り過ぎてしまった。駅の周囲の景観は観光案内にあった通りだし、隣の駅だと言うことに気がつかず、そのまま歩いていったが、なぜか見えるはずの風車が見つからない。おかしいなと思い近くにいたおじさんに聞いて始めて間違いに気がついた。今さら駅に引き返し電車に乗るのも癪だから、おじさんに聞いた道沿

いに風車村まで歩くことにした。しかしこの余計な寄り道のおかげで新たな発見をすることになった。

このあたりにはオランダらしい瀟洒な家並みが並び、庭や窓には綺麗な花が一杯だった。途中で小さな教会もあり、周囲は静寂そのものでしばし感懐にふけた。ほどなく遠くに風車らしいものが見え足並みも軽くなった。

風車村は広いザーン川沿いに昔のままの風車が 6 基保存されている。周囲は広い草地になっていて羊がのんびりと草を食べていた。小川の回りにはエキゾチックな風情の住宅もあり、実際に人が住んでいるようだ。あたりをしばし散策し、ひなびたレストラン風の建物に入った。中にはおみやげ品も並び、名産の木靴を作ってみせる工房もあった。ここで味ったチーズつきのパンケーキとビールの味は格別だった。

Ph.D. Takehisa Ishida  
映像技術ジャーナリスト  
電気通信大学特任講師